

桑野塾+



桑野塾 検索

<http://deracine.fool.jp/kuwanojuku/>

大学などの研究者に限らず、興味を持って研究していることを自由に発表しあう「広場」です。どなたでもご参加いただけます。それぞれの興味が少しずつ重なり合うことで、新たな知見を見いだそうという場です。

第75回

2023年
7月1日(土)
15:00 ~ 18:00

早稲田大学 戸山キャンパス36号館 581号室

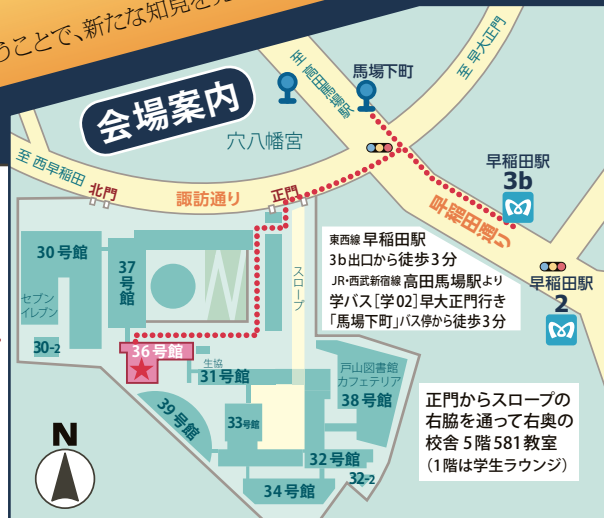
★ どなたでもご参加いただけます。会場に直接お越しください。

☆ 終了後、近くの居酒屋で懇親会を開催します。(飲食費は別途)

※予約の都合上、懇親会参加をご希望の方はなるべく事前にご連絡いただくと助かります。

※報告者・タイトルは変更の可能性もあります。ご了承ください。

参加無料



桑野塾3年ぶりの対面式開催です!

共催: サークス学会 <https://societyforthestudyofcircus.org/>

「ジャパニーズ・アクロバット」たち

—20世紀初めのアメリカ大衆芸能を生きて—

報告者: 青木 深



北村一座のチラシ(1900-10年代と思われる)
ロバート・L・パーキンソン図書館/研究センター蔵、2019年8月21日撮影(青木深)

19世紀末から20世紀初めにかけて、アメリカ合衆国ではサーカスやボードビルが大衆娯楽としての「黄金時代」を謳歌し、地域・階級・世代・ジェンダー・人種・エスニシティの差異を横断して広く消費された。そこに定着していた演芸ジャンルの一つに「ジャパニーズ・アクロバット」があり、日露戦争をはさむ時期に最盛期を迎えた。安藤、上野、北村、杉本、難波、吹野、松本、山田ほか多くの一座が全米各地を回り、「日本人」のグループから離れてソロやデュオで演じた人びともいた。彼らや彼女たちはどのような演技をし、どのように評価されたのか。サーカスやボードビルの「黄金時代」が去り、映画をはじめとする複製技術が社会に浸透し、日米が「敵国」となるなかでどのように生きたのか。

2017年から断続的に行っている「ジャパニーズ・アクロバット」研究の中間報告として、まだ「つぎはぎ」だらけだが、100~120年ほど前の忘れられた文化交流史に迫ってみたい。

●青木 深(あおきしん)

1975年生まれ。都留文科大学比較文化学科教授。歴史人類学、ポピュラー音楽研究、日米交流史。

著書に『進駐軍を笑わせろ!—米軍慰問の演芸史』(平凡社)、『めぐりあうものたちの群像—戦後日本の米軍基地と音楽1945-1958』(大月書店、サントリー学芸賞受賞(社会・風俗部門))、『シリーズ戦争と社会 3 総力戦・帝国崩壊・占領』(共著、岩波書店)など。



『進駐軍を笑わせろ!—米軍慰問の演芸史』(平凡社/2022年10月刊)